私の図書館人生

Passages from My Library Life

今村慶之助*

麻布大学附属図書館

I. はじめに

本誌から“60年代”をテーマに寄稿をもとめられ、私は既に国立大学を定年退職した身であり、やや戸惑ったが“世代間のアイデアを継承したい”という編集委員会からのお勧めにしたがい拙文を寄せることとした。アイデアと言うほどではないが私も60年代を体験した者の一人として、ささやかな体験の一部とその体験を通じて、その後の図書館活動をどのように見ているかなど、感想程度のことを述べさせていただく。

II. 私の体験

私が医学図書館にお世話になったのは、昭和34(1959)年東大医学図書館への就職にはじまる。したがってやや荒々しいが進歩の覇気に満ちた60年代は私に初心を植え付けた年代であるといえる。“鉄は熱いうちに打て”の言葉どおりに、近代的な医学図書館の創設を志向したこの年代の図書館に身を置き、その熱気を全身に浴びることになった。その体験が私の内に図書館員としての使命感を育てたことを強く感じている。図書館先進国と言われる国々においても第二次世界大戦後の復興の波の一環として図書館振興策がとられ、60年代

は世界的に近代的な図書館に飛躍した時代といわれる。わが国の図書館界においてもその流れの中で、これらの国々からの支援を受け、近代的な図書館学の方法論を学び、また図書・資金などの援助もうけた。医学図書館においては米国のCMB (China Medical Board of New York, Inc.) からの援助が特筆される。

多くの医学図書館がその恩恵に浴したが、東大でもこのCMBの寄贈を受け、現在の医学図書館を建設した。私がここで述べたいのは、このCMBが寄付の条件として東大医学部へ示した提言についてである。その要旨は次のようであった。

1. 独立棟であること。
2. 当座必要な参考図書を除き、全ての図書を中央化すること。
3. 学部職員として教授会に出席し、発言する資格を有する、訓練された司書によって指揮運営されること。
4. 書籍も雑誌も、いずれも学生も使用しうるように運営すること。
 - (1) 放課後数時間は開館すること。
 - (2) 学生の使用にともないその世話をする十分な職員をもつこと。
 - (3) 学生の使用のための場所を提供すること。
5. CMBは建物ならびに内部施設にたいし50:50の比(同額)で25万ドルまでの寄付を考慮する。

この提言は東大医学部がこれらの諸項目を実行することにより、その成果としての近代的な図書館サービスが広く国内に普遍し、日本の医学の進歩に寄与したいとするものであった。当時の東大

* Keinosuke IMAMURA : Library, Azabu University.
1-17-71 Fuchinobe, Sagami-hara 229, Japan.

の多くの学部はこのいずれの項目にも当てはまる場所は少ない旧態依然とした状態であり、医学部も多くの図書・雑誌が教室等に分散した古い体制のもとにあった。しかし学内においては図書館員はもとより、学生・教員などからも学術や社会の進歩に沿った図書館サービスへの改善が強く求められており、医学部においてもその改善の気運は徐々に醸成されつつあったと思われる。したがってこの提言の第5項目に示す50%（25万ドル：9,000万円）の学部側の負担金の拠出についても、自助的な革新への意識が改善の鍵としてはたらく、その実行を促したもので、CMBの他大学等への援助においても、この自助を促す同様の方法により、単に建物の寄贈に止まらず、基盤整備として図書館システム全体の改善を求めたものである。

戦後から60年代にかけての外国からの援助の一つに留学を挙げなければならない。その多くは米国への留学であったが、研究者と共に多くの図書館員がCMB等の奨学金を得て外国へ渡り、近代的な図書館活動についての知識と体験を身につけて帰国した。

各大学の図書館報等に利用者の声として、外国の図書館の見聞記がよく収載されている。その記事の多くは外国の図書館サービスへの賛辞と日本のそれへの慨嘆の記であると言えないこともない。戦後すでに半世紀を経ようとしている。そして日本は世界の経済大国と言われている。いつまでも“外国の図書館”でもあるまいとの想いは誰の胸にもあることではあるが、CMBの提言を今日的な視点で見たときに日本の大学図書館の進歩のいかに遅々たるものであるかを認めざるをえないのではない。多くの図書館員が外国に渡り、近代的な図書館学を日本に導入した。もちろん、多くの面での進歩はあったが、その後半世紀近い歳月を経たにもかかわらず、米国などの図書館システムの中で日本が学ぶべき基本的なものがどうしても日本に移植できないのは何故か。60年代の指導

者 Dr. Brodman は日本を訪れた際“日本の図書館は米国より10年遅れている”と言ったが、30年を経た今日の両者の格差が縮まらないことについて、サービスを受ける側に対して私共は責任を感じなければならないと思っている。

21世紀は情報化社会・生涯学習社会と言われる。図書館の雑誌などにも未来志向の明るい展望をつづる記事も多い。私も情報の価値が高まり、社会への影響力が強まるであろうし、多様な学習機会を人々は求めるであろう、その方向は誤りなく進むと信じている。生涯学習をめざす社会はまさに図書館の出番、追い風を感じるが、座して僥倖を待つ環境にはないような気がする。何が問題なのか考えてみよう。

Ⅲ. 図書館活動の姿について

現在の図書館活動は60年代の大きな発展に支えられていることは言うまでもない。ソ連のスパートニク（1957）に始まる米ソの宇宙競争は科学の巨大技術のスタートをわれわれに強く印象づけた。LCのMARK Project（1961）のニュースは図書館と情報の結び付けを自然なものにした。医学においてはNLMのMEDLARS（1962）によるINDEX MEDICUSが私どものもとに届いた。そして私達は東大でTOSBAC 3400を使って雑誌システムの電算化（1963）にとりかかった。このような最新の科学技術に導かれた図書館活動の斬新な姿に、図書館員の誰しもが夢を託したことは間違いない。しかし私は電算機による革新的な作業に熱をあげながらも、これが利用者にとどれだけ便利になるのかとの想いは、頭のどこかに微かなながらもあったような気がする。やがて歳を重ねるにしたがい図書館活動の見方も変わり、その思いは高まり、問題の解決を阻むものを身近かに感じ、その時どきの職務のなかで、その解決に努めたが“道なお遠し”の感が深い。ここで私見のい

くつかを取り上げてみたい。

その1は蔵書についてである。私が若い頃読んだ蔵書構築についての論文の中で High value low use という言葉に会い、今でも新鮮な印象が残っている。その頃蔵書論に Core という言葉が流行していた。Core journal など利用度の高い雑誌などの評価が盛んに行われていた。ブラッドフォードの法則などが影響したのかも知れない。また医学図書館は雑誌依存が大きいので利用率の高い雑誌の影響に研究が傾くのは自然であった。しかし、精選された High value low use 資料を利用者に保証すべき図書館の責任を私も感じ始めていたが、日本の図書館界は一般的に蔵書構築の視点が弱く、その中で私どももこれを図書館活動の重要な一環として育てる努力を怠ったために、Weeding など蔵書の質を高める活動が定着せず、日本の図書館活動の可能性を著しく弱めていると残念に思っている。その頃東大の医学図書館に医学中央社から抄録に使用後の雑誌が寄贈されていた。それらを書架に繰り込みながら、医学研究の幅の広さに目を見張ったものである。図書館員が図書の選択権を持たない限り Low use 資料の収集は難しい。かつて東京での世界医学図書館会議の、この図書選択のテーマの場で、自らが医学者でもある日本のある医学図書館長が“医者ではない司書が医書を選択できるのか”と発言し、議長から“司書は図書の専門家である”といなされたことがあった。

米国の図書館には伝統的に良書選定の精神があったと言われる。フロンティア精神に通じるライブラリアンシップを育て、支えてきたものの大きな部分にこの良書普及の使命感があったと思う。しかし米国においても大学では、この図書選択権がかつては教員にあり、それが図書館員に移る過程において、両者の戦いの歴史があり、選書権に代表される図書館員の専門性の主張が社会に受け入れられ、その結果として現在のバランスのとれた

蔵書構築がシステム化され、また図書館員の資質向上にも大きく寄与したと推察される。有名な Farmington plan などの共同収集システム、USBЕなどの寄贈交換システムなどは選書の主役が図書館員であればこそ生まれたもので、個別の各図書館が用いる図書館員の専門性を発揮せしめる選書システムとリンクし、補完しあいつつ精選された無駄のない集書が行われている。

日本で共同収集や寄贈交換システムが医学図書館を除いて育たないのは、選書権が図書館員に無いことによるのは明らかで、それによる有形無形の損失は計り知れない。現在の図書館を取り巻く環境の中で、1図書館ではどうにもならないことが多いが、その中で特色ある蔵書構築などは図書館間の共同収集・寄贈交換などの支援システムがないとできるものではない。私は東大時代に裏田武夫先生の指導による USBЕ などとの寄贈交換業務を学んだ。実際の作業は青木孝雄、早川英子両氏が主に当たったが、その注がれた膨大なエネルギーと果実の貴さに感銘を受けた。このような共同収集・寄贈交換システムが日本に必要として生まれたのが医学図書館の交換制度で、今後の発展と各分野に広がることが期待される。

選書権が図書館員に無い限り、精選された蔵書構成はできないし、図書館員の資質の向上も期待できないとの思いから、筑波大学在任中に教官当積算校費の1%の図書費を要求して認められた。発足(1979)当時は約2,500万円/年で、これを「新刊和書購入費」と称して、わが国で刊行される学術図書を図書館員のみによる選書によって購入することにした。毎月200万円程、和書に限るとはいえこれの選択に当たる職員の経験と図書の集積の意味は大きい。私は5年たったなら教員の図書館を見る目が変わるのではないかと期待した。勿論、図書館員のみによる選書が望ましいわけではない。教員の学術分野について専門家としての意見や書店員の出版にかかわる専門的知識と、図

書館員の専門性との、この3者の協力が得られた時こそ真の選書が果たされるであろう。筑波大学の選書システムは、教員の側に過度に傾いた選書のポールを図書館の側に引き戻したものである。私の在任中に和書が充実してきたとの感想や、洋書もこの方法で買ってほしいとの声も聞いたので、図書館の努力がそれなりに評価を得ていると思う。

今後情報の価値が高まるにしたがい、収集する情報の質が問われ、その選別をする選書システムの機能が一層重要になる。大学図書館においてはその蔵書数が何十万、何百万冊と言っても、その内容は規模が大きくなるにしたがい、著しい重複と偏在によって積まれた脆弱なものであることを直視することが今後のために大切なことである。蔵書構築はどの面からみても図書館の高い総合力が必要で、集中化・共同収集など、学内学外を問わず幅広い協力支援を受けることのできる体制が望まれる。

最近、中央教育審議会の報告に関わる記事が新聞などに散見されるが、そのなかで大学の図書費の少なさを嘆く記事が目を引く。しかし本当は図書費の少なさより使い方が問題である。文部省の統計¹⁾と米国のそれ²⁾を比較すれば明らかなことであるが、日米の大学図書館の図書費の比は、教員と学生を含めて1人当たり約22,000円 : 11,000円(1985)、日本は2 : 1の割合で多い。最近米国からは予算削減など暗いニュースを聞くが、集書について協力度の高い米国の大学図書館は、逆境への適応性は日本より格段と高いと思われる。この少ない予算で素晴らしい蔵書を生み出すシステムが、日本でどうにも育てられないものの一つである。

その2は時間外開館についてである。私は1968年にCMBの資金で渡米し、多くの大学図書館等を見学した。ワシントン大学(St.Louis)に4カ月間滞在したが、その間に図書館が夜12時まで開館していたので、閉館の少し前に入館しその様子

を見学したことがあった。在館者は多くはなかったが、それでもちらほらと研究者や学生が読書をしているのが見られ、その真摯な学習の姿に私は深い感銘をうけた。私は口の中で“これが図書館だ”と呟いていたその時の情景をいまでも忘れることができない。私は筑波大学図書館の創設に際し、夜間開館を重点事項として夜10時までの開館を実現した。時々閉館の前に館内を歩き回り、かつてのワシントン大学の様子を重ね合わせて想い、また図書館のエネルギーを肌感じて職務についての責任の重さと、それを多少なりとも果たしたとの思いを覚えたものである。日米の大学図書館の開館時間を数字として表すことは難しいが、米国の Universityと言われる大学では、年間の開館日が360日、朝9時から夜12時までというところが多い。週休二日制が徹底している米国においてである。

私達は日本でも安定的・普遍的なシステムとして、このような夜間・休日開館ができるようにすることが社会の期待であり、図書館活性化の鍵であることを念頭におき、真剣に取り組まなければならない。

「いつでも だれでも どこでも」は日本の図書館界のテーマである。「いつでも」開かれている図書館にすることが米国のようにできないのは、日本と米国とでは異なるところがあるのかもしれない。米国では学生はよく勉強しないと卒業できないし、教員は激しい競争に曝されているので、それぞれよく図書館を利用すると言われる。確かにそれぞれ事実には違いないが、私は米国の図書館員のニーズに応えようとする積極的な姿勢、職務にたいする使命感が支えているように感じている。図書館はニーズに応えることによって機能する施設である。図書館のテーマ「いつでも」はニーズそのものと言ってよい。

図書館の利用者は常連のように頻繁に顔を見せる少数の人、ときどき来館する人たち、たまにし

か図書館には来ない多数の人々から成る。どのグループに属していても、来館したときには同じように満足が得られなければならない。そこが難しい。図書館員も人間だから常連とは親しくなって、とかく過剰サービスもいとわない。滅多に来ない人とは人見知りして、機械的な反応に陥りやすい。常連の人たちは図書館の実態をよく知っているのでもその範囲内で要領よく利用し、時間外開館などは求めない。利用頻度が少ない人ほど図書館の事情に疎く、満足の範囲も逡巡し疎外感を受けやすい。しかもこのような利用の少ない人々が利用者層の大多数を占めるところに問題の本質があり、このような利用の少ない人々の求めるものに応えるには「いつでも」の要件をできるだけ満たすことが望まれる。

その3は図書館員についてである。私は大学で図書館学を専攻し実務についた。卒業生達の中で、図書館の実務についた人たちの多くは縁の下力持ちで、日の当たらない立場の人が多く見受けられる。長年専門分野で精励し業績を積まれた人が、その評価を得て図書館長となり、抱負経綸を発揮されて後進の指導に当たるのが世間の在るべき姿ではないか。大学においても事務長などは他の分野の人の処遇に使われ、図書館員の昇進が阻まれる。国立大学では図書館の部制が整備されるに従い、他の職制と共に管理職に途用される道は開かれているが、後進性は依然残っている。まして CMB の提言にある“訓練された司書”が大学図書館長の地位に就くことは、現今の状況ではとても考えられない。専門職員の専門的知見を遺憾なく遂行する道が閉ざされていることは、図書館員の不幸のみならず、このサービスを受ける側からみてもまことに残念なことと言わざるを得ない。また社会の健康な発展のためにも好ましくない。しかしその改善を図るには、現在の図書館の姿を正確に把握し、その職責にある図書館員が職務の遂行を通じ社会の共感を得て道を拓く以

に展望は見出だせないと感じている。

中根千枝説³⁾によれば「日本社会は情緒に基づくタテ型社会で、合理主義・契約精神の根付いた欧米と異なり、社会を横断的に結ぶ職能別組合よりは、タテ型の企業別組合になり、組織を超えた移動を妨げる。その結果能力よりはグループ内の人間関係が重視され、能力に基づく専門家の育成を困難にする」と言う。このような社会構造の運動法則の下に、学校間とか企業間の並立する、孤立的な集団間の競争が展開される。ここに日本企業の効率が生まれる秘密があり、和とか序列など日本的な目に見えない人間関係により、厳しい環境に耐える秩序が維持される。このような連帯性の少ない大小の集団は、その運動を高めようとするとき、行政組織への依存度を高め、その指導に敏感になる。そのため図書館のような専門機能の独立性を維持することが後退する。公共図書館が地方自治体行政の強い統制の下にあり、また図書館間の自主的な向上心による異動の機会を得ることが困難など我々が日々体験しているところである。日本の図書館界をその視点から見ると、図書館員としての専門家の育成がかなり困難な社会であると言えよう。このことをしっかりと念頭におかなければならない。このような社会的な制約を克服して明るい展望をもたらす方策を見いだすことができるか。

最近社会的に重要な職業として、看護婦さんの養成と処遇の問題が報じられている。昼夜の別なく24時間体制で過酷な勤務に耐えるには、たんに待遇の改善だけでは勤まるものではないと思う。数年にわたる体系的な専門教育の下に、看護婦としての職業的な使命感が育てられ、職務の遂行を支えているもので、他の社会的に重要な専門性を必要とする職務に共通する。学校の先生にしてもお巡りさんにしても、ほとぼしるような熱い奉仕の発露に触れたときに、私共は感謝と敬意を感じる。近年の公共図書館の素晴らしい発展は、貸出

を基本においたサービス重視の活動が地域住民の熱い支持を受けたもので、図書館活動の今後に明るい展望をもたらすと共に、看護婦さんに劣らず高い専門性と強靱な精神力を要する図書館員としての専門職集団の可能性を見る思いがする。

しかし専門性を疎外する社会的要因を抑制し、図書館の発展を確かにするには、全ての館種が団結し、社会に対しその存在感を高めなければならない。それには人事の視点を図書館の設置母体内のタテ型社会から、図書館間を結ぶ横断的な専門職業集団に移すことで、そこから具体的な対策が考えられるであろう。その中の一つとして公共図書館の今後の最も重要な課題として専門職の館長を増やすことがある。大学図書館でも同じことではあるが、それぞれの図書館が抱える問題を解決するために専門職による管理運営が必要であるのみならず、また社会的にも図書館の館長は専門職でなければならないとする認識が定着しなければならない。大学では当然無理としても公共図書館では法律の支えもあり、図書館界が一致団結して進めば道は開けるのではないか。これの停滞から脱却するために図書館界は、その準備や支援体制について今一步の努力が必要と思われる。その意味でこの館長問題は特に全ての館種の指導者及び図書館情報学を担当する教員の協力が求められる。教員が教育・研究と共に実務を行うことは、医学者が教育・研究・臨床をともに実践することと同じであり、館長としての人材をうるために、さらには教育と実務との間の人の交流による人材の育成の観点から、また図書館学の発展のためにも今後の図書館界の重要な努力目標であると思う。

IV. これからの図書館について

臨教審から中教審、大学審へと大学改革の提言は数多く出されたが、東大を頂点とする競争のない序列構造は当然揺るぎそうもないし、教育の中

味を問わず、この序列に連動した学生の就職システムは、日本特有の効率の良い新卒者市場として機能しているので、大学改革のインセンティブははかなく弱いように見える。しかし大学は子供の数の減少など社会基盤の変動に圧され“社会における大学の在るべき姿”を模索し始めた。大学は社会と連動して大きく動こうとしている。その中において図書館は真に大学の教育研究支援の体制が組み立てられるか、重大な局面に在ると言えよう。図書館は社会との接点にあり、社会の今後の在り方を示す生涯学習・情報化・国際化などの指標は、未来志向型の図書館活動に潜む本質的な願望と言えなくもない。知識は大学の占有物ではなく社会との共有の資産であるとし今後を見つめるならば、我々の進む道は医学とか大学の枠をさらに広げ、図書館という共通の働きの下に団結し、その可能性を高めることにあることは誰の目からみても明らかなことではないか。

図書館は文化の創造を支えるパイオニアの覇気が必要。本来サービスには古いものより新しいものへ移そうとする創造的な姿勢が無いとサービスにならないところがあり、規則の内側を遵守する官僚性に染まるのを避けなければならないが、ここが日本的な弱みかも知れない。指導者はこのあたりを十分に踏まえて舵取りをすべきで、図書館員の日頃の苦勞が報われるようにするためにもう少し工夫するところがあるのではないか。図書館員の願望を集約するためには、その一つは図書館員の一人一人が日本図書館協会の個人会員として入会し、一つにまとまるように導くことである。医学図書館とか大学図書館とかは機関の活動であって、個人としてはJLAの会員であるのが図書館員のコンセンサスとなるべきである。“急がばまわれ”というのがこれが徹底すれば、図書館界の前途にかなり明るい展望が開けるのではないかと思う。

V. おわりに

私にとって60年代は新人の年代であったが、この頃を回顧するとき先ず思い出されるのが、多くの熱心な図書館員の方々の面影である。医学図書館は大学の中で、その活動も職員の意識もやや孤立的であるが、ほかに見られない幅広い活動ができたのは、これらの方々が恵まれない環境の中でJMLAの組織を強化し、医学図書館員としての専門集団の活動の場を守り育ててきたことによるものである。今後はこの道をさらに広げ、他分野との協力を強めることにより、これからの図書館員

の皆さんが自分の職務が社会を改革し、創造性のある活力に満ちた新しい時代に導くのだとの強い確信をもって進まれることを心から願っている。

参考文献

- 1) 昭和62年度大学図書館実態調査結果報告 文部省, 1988.
- 2) Higher Education General Survey-College and University Libraries, Fall 1985, (HEGI-SXX) ALA 1987.
- 3) 中根千枝 タテ社会の人間関係. 単一社会の理論. 講談社, 1967.